

定 期 作 況 報 告

平成30年 9 月
(9 月 20 日 現 在)



北見農業試験場

1. 気象経過

8月下旬：最高気温は平年より低く、最低気温は平年並で、平均気温は平年よりやや低かった。降水量は平年より多かった（平年比180%）。日照時間は平年より少なかった（平年比24%）。

9月上旬：最高気温、最低気温および平均気温はともに平年並であった。降水量は平年より少なかった（平年比27%）。日照時間は平年並であった（平年比91%）。

9月中旬：最高気温は平年よりやや高く、最低気温は平年より低く、平均気温は平年よりやや低かった。降水量はゼロであった（平年比0%）。日照時間は平年より多かった（平年比168%）。

以上のことから、この1か月間（8月下旬～9月中旬）は、気温は平年よりやや低く、降水量は平年よりやや少なく、日照時間は平年並であった。

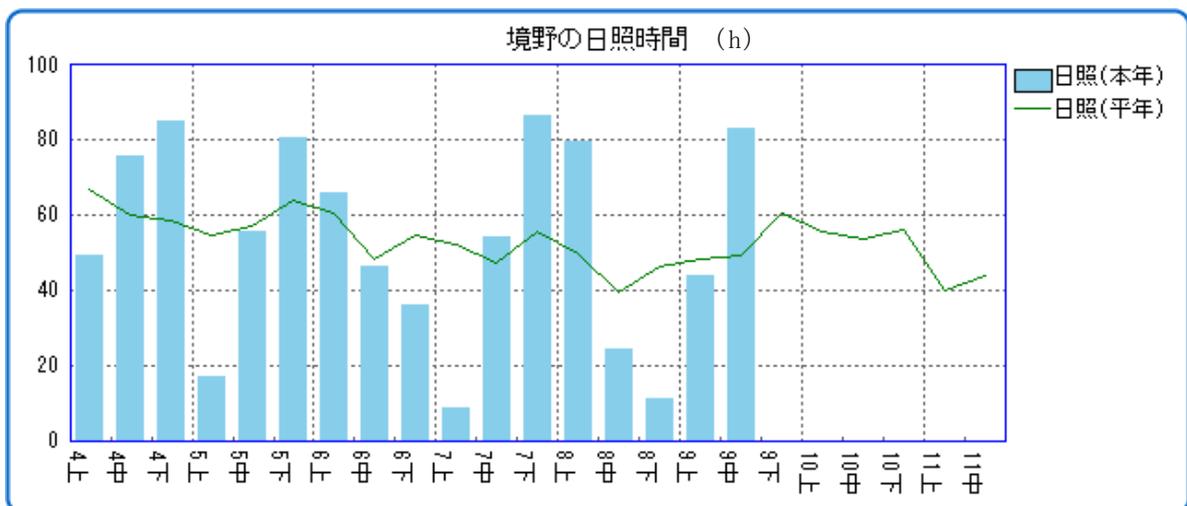
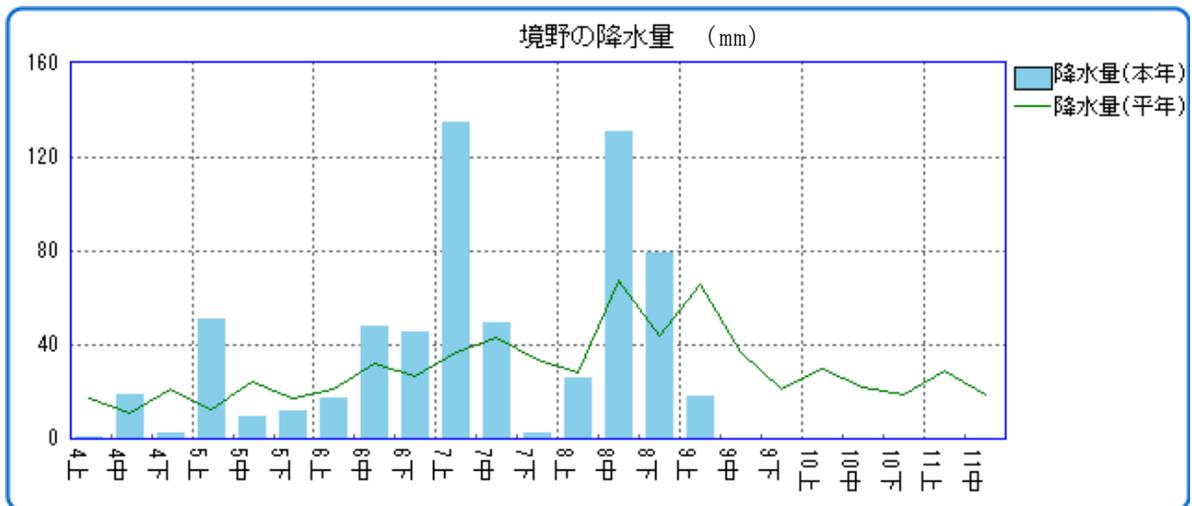
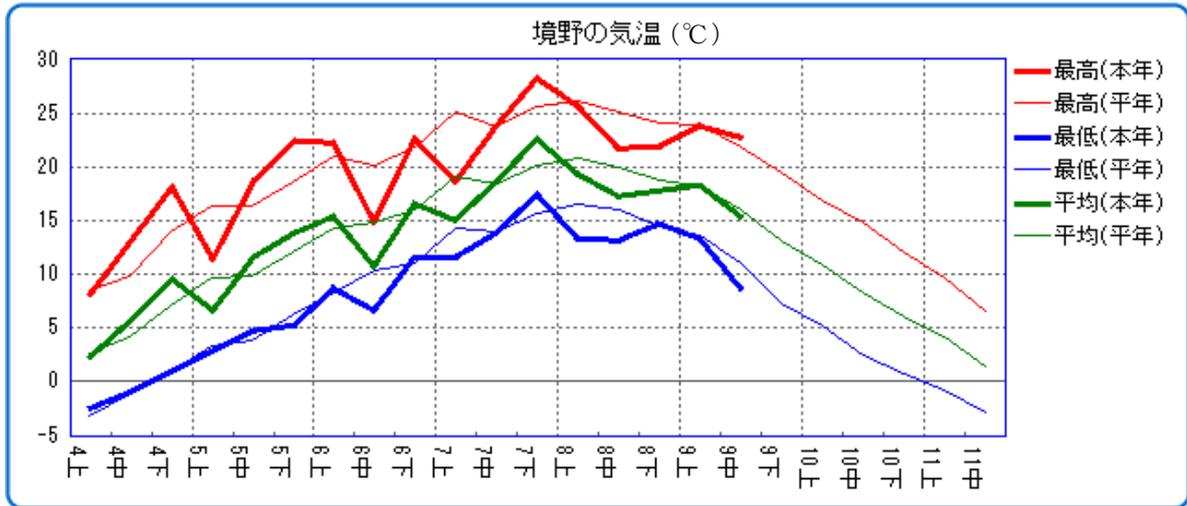
気 象 表

月 旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)		
	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
8月 下旬	17.8	18.8	-1.0	21.9	24.1	-2.2	14.7	14.5	0.2
9月 月上旬	18.3	18.3	0.0	23.7	23.9	-0.2	13.3	13.6	-0.3
9月 月中旬	15.3	16.0	-0.7	22.8	21.8	1.0	8.7	11.1	-2.4

月 旬	降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
8月 下旬	79.0	43.8	35.2	11.2	46.2	-35.0
9月 月上旬	18.0	65.6	-47.6	44.1	48.5	-4.4
9月 月中旬	0.0	36.8	-36.8	83.1	49.4	33.7

注) 観測値は置戸町境野のアメダスデータである。

10年平均は前10か年間の平均値である。



2. 当場の作況

注) 本作況報告は北海道立総合研究機構北見農業試験場の平年値に対する生育良否に基づいたものであり、オホーツク管内全体を代表するものではありません。

1) 春まき小麦 作 況：やや不良

事 由：稈長は平年並で、穂長はやや長く、穂数は多かった（前々報）。開花後の6月下旬以降に降水量が多かったことから赤かび病が多く発生した（前々報）。また、7月上旬が低温で降水量が多く、日照時間も少なかったことから、不稔となる小花が認められた（前報）。このため、子実重は平年比95～99%で、リットル重は平年を下回った。千粒重は平年並であった。

以上のことから、目下の作況は「やや不良」である。

調査項目	春よ恋			はるきり		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較
子実重(kg/10a)	493	518	△ 25	513	517	△ 4
同上平年比(%)	95	100	△ 5	99	100	△ 1
リットル重(g)	776	806	△ 31	790	805	△ 16
千粒重(g)	40.8	39.4	1.4	43.5	41.4	2.0

注) 平年値は前7か年中、27年(最豊)、平成29年(最凶)を除く5か年の平均。

2) とうもろこし(サイレージ用) 作 況：やや不良

事 由：9月20日の稈長は平年を24cm下回った。抽糸期後の8月中旬以降の平均気温は平年並からやや低く推移したことから、登熟は平年よりやや遅れていると推測される。

以上のことから、目下の作況は「やや不良」である。

調査項目	チベリウス		
	本年	平年	比較
稈長(cm) (9月20日)	248	272	△24

注) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、25年(最凶)を除く5か年の平均。

3) 大豆

作 況：不良

事 由：主茎長、主茎節数、分枝数はいずれも平年を下回っており、着莢数も平年よりかなり少ない。8月下旬以降のやや低温傾向により登熟はやや遅れており、粒大への影響が懸念される。

以上のことから、目下の作況は「不良」である。

調査項目	ユキホマレ		
	本年	平年	比較
成熟期 (月.日)		9.24	—
主茎長(cm) (9月20日)	52.9	73.9	△21.0
主茎節数(節) (9月20日)	9.5	11.4	△ 1.9
分枝数(本/株) (9月20日)	4.1	5.6	△ 1.5
着莢数(莢/株) (9月20日)	63.4	70.8	△ 7.4

注) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

4) 小豆

作 況：不良

事 由：8月下旬以降、やや低温傾向で経過したため、「サホロシヨウズ」「エリモシヨウズ」とも成熟期に達していない。両品種とも生育は平年を下回っている。着莢数は平年よりやや劣る程度まで回復したが、莢の登熟はかなり遅れており、品質や粒大への影響が懸念される。

以上のことから、目下の作況は「不良」である。

調査項目	サホロシヨウズ			エリモシヨウズ		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較
成熟期 (月.日)		9.19	—		9.24	—
主茎長(cm) (9月20日)	64.5	83.3	△18.8	58.3	74.4	△16.1
主茎節数(節) (9月20日)	13.8	13.9	△ 0.1	14.2	14.3	△ 0.1
分枝数(本/株) (9月20日)	3.5	4.0	△ 0.5	3.4	3.9	△ 0.5
着莢数(莢/株) (9月20日)	50.4	54.2	△ 3.8	47.6	55.1	△ 7.5

注) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

5) 菜豆

作況：平年並

事由：成熟期は平年より8日遅い9月9日であった。成熟期における草丈はかなり小さく、主茎節数と分枝数もやや少なかった。着莢数は平年をやや上回り、一莢内粒数は平年並であった。但し、8月下旬～成熟期までの気温がやや低温傾向で、草姿もかなり小さかったことから、粒大が小さくなることが懸念される。

以上のことから、目下の作況は「平年並」である。

調査項目	大正金時		
	本年	平年	比較
成熟期 (月.日)	9. 9	9. 1	8
草丈(cm) (成熟期)	29.0	49.4	△20.4
主茎節数(節) (成熟期)	5.6	5.3	△0.3
分枝数(本/株) (成熟期)	4.6	5.1	△0.5
着莢数(莢/株) (成熟期)	22.3	20.1	2.2
一莢内粒数	2.93	2.86	0.07

注) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

6) ばれいしょ

作況：不良

事由：「男爵薯」は枯ちょう期が平年より8日早い8月23日であったため、でん粉価は平年並であったが、上いも重は平年をやや下回った。「コナフブキ」は前報に引き続き塊茎の肥大が緩慢で、でん粉重は平年を上回っているが、上いも重およびでん粉重は平年を下回っている。

以上のことから、目下の作況は「不良」である。

調査項目	男爵薯			コナフブキ		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較
枯ちょう期 (月.日)	8.23	8.31	△8	—	10.4	—
上いも重(kg/10a) (9月20日)	4357	4613	△256	3975	4797	△822
でん粉価(%) (9月20日)	14.8	14.9	△0.1	22.8	22.0	0.8
でん粉重(kg/10a) (9月20日)	—	—	—	867	1011	△144

注) 平年値は前7か年中、平成24年(最豊)、29年(最凶)を除く5か年の平均。

7) てんさい

作 況：やや不良

事 由：地上部および根周は、前報に引き続き平年並であったものの、気温が平年より低温傾向に、降水量も平年より少なめに経過したことから、根重の増加が抑制され、平年を下回った。

以上のことから、目下の作況は「やや不良」である。

調査項目	移植						直播		
	リッカ			アマホマレ			リッカ		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
草丈(cm) (9月20日)	62.5	60.1	2.4	62.6	59.1	3.5	63.4	62.9	0.5
生葉数(枚) (9月20日)	27.8	24.4	3.4	30.4	27.5	2.9	26.4	22.0	4.4
茎葉重(g/個体) (9月20日)	799	659	140	942	782	160	745	740	5
根重(g/個体) (9月20日)	994	1135	△141	987	1122	△135	738	918	△180
根周(cm) (9月20日)	37.1	37.1	0.0	38.0	39.1	△1.1	31.8	33.8	△2.0

注1) 平年値は前7か年中、平成26年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

注2) 根中糖分は、分析機器修理などのため、未調査。

8) 牧 草 (チモシー)

作 況：平年並

事 由：1、2番草の合計乾物収量は平年比97%と平年並であり(前報)、3番草再生時(2番草刈取後25日目：8月28日)の草丈についても平年並であった。

以上のことから、目下の作況は「平年並」である。

調査項目		ノサップ		
		本年	平年	比較
草丈(cm)	3番草再生時	46	42	4

注) 平年値は前7か年中、平成24年(最豊)、27年(最凶)を除く5か年の平均。

9) たまねぎ

作 況：やや不良

事 由：枯葉期は「オホーツク222」ではやや遅く、「北もみじ2000」では概ね平年並であった。平年と比べて、両品種とも平均一球重はやや軽く、総収量はやや下回った。変形球等により規格内率はやや低く、規格内収量は「オホーツク222」では平年を下回り、「北もみじ2000」ではやや下回っている。

以上のことから、目下の作況は「やや不良」である。

調査項目	オホーツク222			北もみじ2000		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較
根切日 (月.日)	8.13	8.12	1	8.23	8.24	△1
枯葉期 (月.日)	8.24	8.21	3	8.28	8.27	1
収穫期 (月.日)	9.3	8.30	4	9.7	9.8	△1
総収量 (kg/10a)	7091	7974	△883	6795	7292	△497
規格内収量 (kg/10a)	5685	6951	△1266	5905	6661	△756
同上平年比 (%)	82	100	△18	89	100	△11
規格内率 (%)	80	87	△7	87	92	△5
平均一球重 (g)	237	261	△24	224	239	△15

注) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、25年(最凶)を除く5か年の平均。